生涯学習情報誌
フォンズ
No. 66
2013年７月10日
発行

常陸太田市フォンズ・ネットワーク
事務局 常陸太田市生涯学習センター内
〒313-0061
茨城県常陸太田市中城町3280番地
TEL：0294(72)8888
FAX：0294(72)8880

「昭和の木崎一町」

水の想い出 ⑥④

母の実家は神郡（かんごおり）というところ、筑波山への街道沿いにあった。夏休みに母の帰省でおばあちゃんちに泊りに行くのは、それはそれは楽しみだった。祖母の家は、大きな門構えがあり、車でその門を通り抜けるのに、幅いっぱいでびくびくしたものだった。セミを捕まえたり、遠くの畑に大きくなりすぎたトマトやキュウリをもぎりにいったり、毎日が楽しかった。中でも一番の冒険は、近くの小川に行くことだった。今思えば、川幅も１mもなく小さな川だったのだろうが、小学生低学年のころには大冒険の舞台に思えたものだった。大きな石を組んで乗せただけの橋もあったが、いつ行っても崩れたまま。川の中をザブザブと歩いていくと川がカーブして淵になっているところには必ずお羽黒蜻蛉（とんぼ）がとんでいるのだが、怖くてその淵の近くには寄れない。しょうがなく精一杯手を伸ばして差し出した虫採りアミは空を切って川面にボチャンというのが常だった。むんとする夕方の田んぼまわりの草いきれまで、今でもありありと思い出せる程、大事な大事な遊び場だった。毎年一緒に遊んだ姉弟、従兄弟たちにとってもとっておきの場所だったのである。

法事かなにかで、数十年ぶりに母の実家を訪れた折、時間の合間を見て思い出の川をみんなで見に行った。あるべきところにあったのは、護岸工事された用水路…。風景が変わると幼い頃の思い出も失われてしまうような気がした。少子化の憂いはつくば市とはいえ、この地区も同じ問題を抱えている。子どもたちの歓声が聞こえない川ばかり造ってるからだ、と歳を同じだけ重ねた姉弟・従兄弟たちと盛り上がったのは、さっき見た風景を忘れてしまいたかったからに違いない。

（塩原　慶子）

フォンズとは、ラテン語で泉の意味です。とぎれることなく新鮮な情報がお届けできるようにと名付けられました。

2
こんにちはフォンズ

常陸太田古写真館

いにしえしゃしんかん

昭和から平成になり、変わりゆく街、変わらずに残る街並み…
過ぎ去りし日々や心の奥に残っている、古き良き時代を懐かしみながら、
常陸太田の今と昔をご紹介いたします。

❶木崎一町　下井戸坂

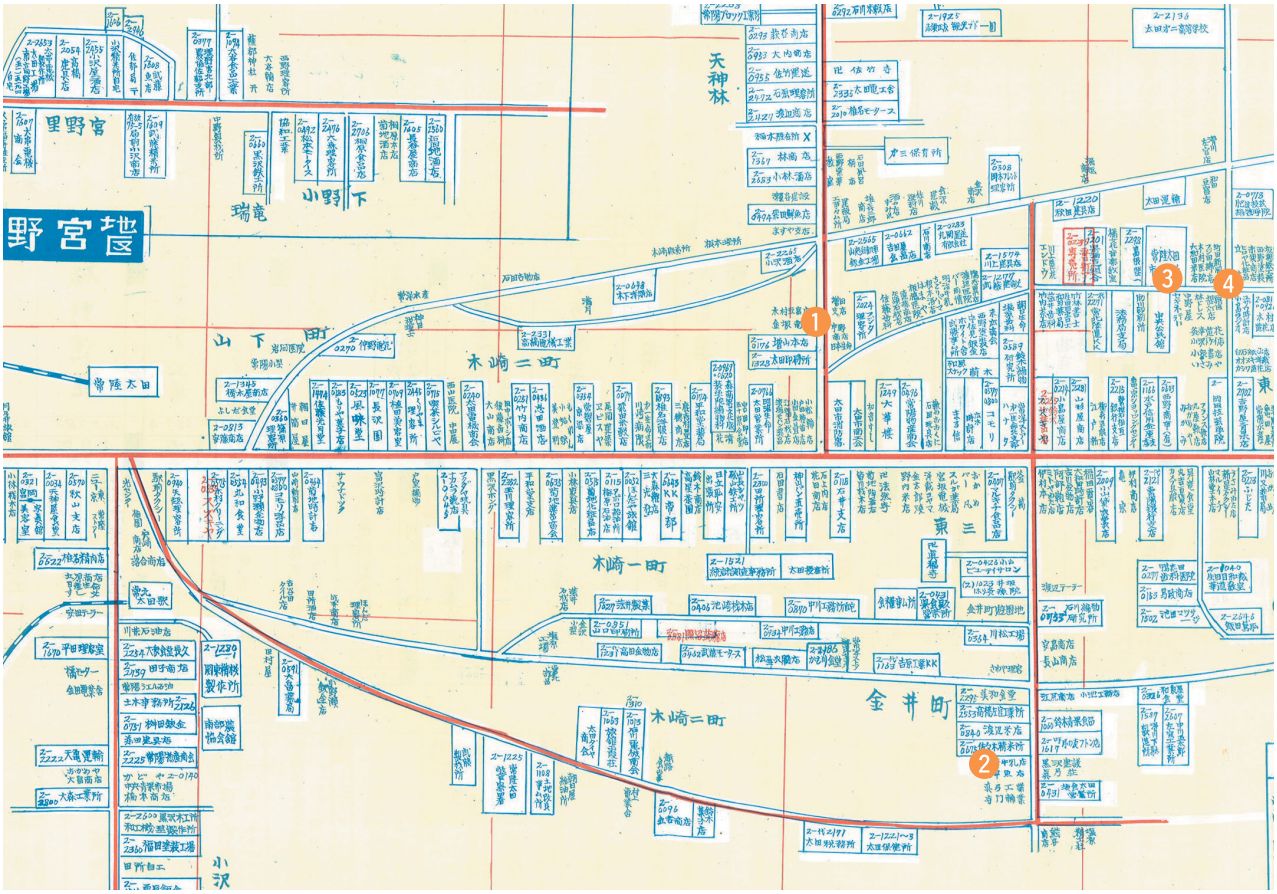
❹西一町　交差点（郷土資料館分館前）

❷金井町

❺内堀町　交差点

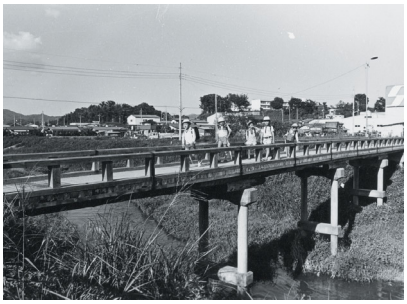
❸梅津会館（郷土資料館本館）

❻ヨネビシ醤油



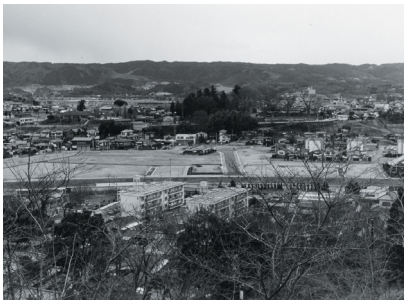
撮影されたころの常陸太田商工案内の地図

⑦太田落雁



⑩新宿町　前坪橋

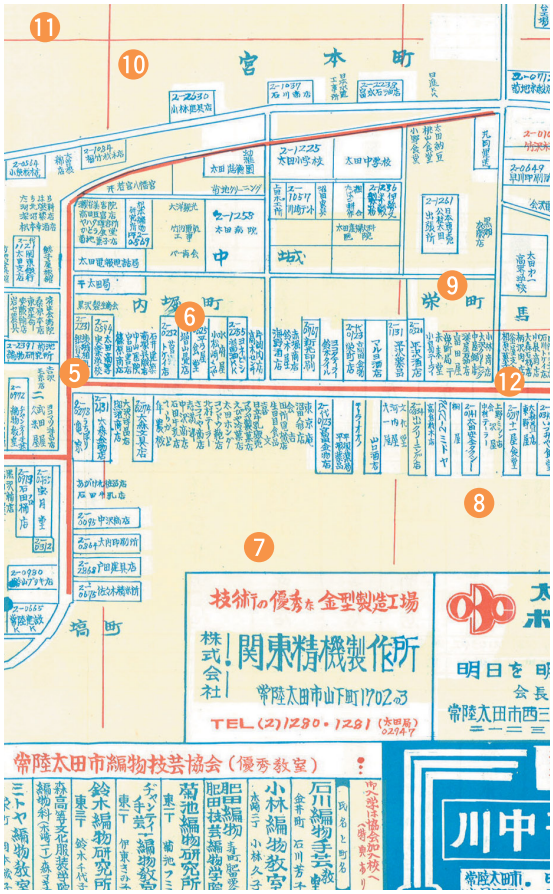
⑧中城町



⑪西山公園

⑨旧専売公社前

⑫馬場町　太田一高入口



ここに掲載した以外にも「常陸太田古写真館」Web サイトで513枚の懐かしい写真を見ることが出来ます。

「常陸太田古写真館」http://hitachiotaphoto.com/
facebook ページ：https://www.facebook.com/hitachiota.photo
twitter：https://twitter.com/hitachiotaphoto

※モノクロの昭和（年代不明）の写真の脇に現在のカラー写真を配置しました。

時代を感じる団扇と扇子の展示会を紹介します

「鯨ヶ丘のひなまつりに飾るおひな様を探していたら、古い桐箱や新聞に包まれたものがでてきまして。あけてみましたら、おしゃれで粋な団扇（うちわ）や扇子（せんす）が見つかりました」と語る立川久泰さん政子さんご夫婦。その団扇を、店内に初めて展示したのは2009年、その後震災などで一時中断し今年また新たに展示会が行われます。

それぞれに絵柄やデザインの見事な団扇は、包んであった新聞の日付から大正～昭和初期のものでしょうか。当時、呉服店をはじめとしていろいろな商店のPRをかねて、夏のご挨拶に配られたのであろう団扇の数々。なかには「太田小唄」と歌詞の書いてあるものや、長良川の鵜飼い見物に使われたらしい油紙で作られた珍しい1枚もあります。

「この団扇であおぐと、竹はよくしなるので涼やかさがが違うんですよ。とてもやさしい風がくるんです。日本人の繊細さ、器用さなどすべて形となって現れている気がしますね」と政子さん。

古いものが見直されている今でさえ、伝統的な「もの」の中に含まれる価値に気づかれないまま、捨てられたり壊されてしまうことの多さに心が痛みます。こうして奇跡的に（と言っていいと思いませんか？）残された団扇や扇子が物語ってくれるもの、ぜひ足を運び手にとって感じていただきたいと思います。

【展示会】
会期　7/20㈯～8/11㈰ 期間中無休
会場　立川醤油店（西二町）

油紙でできた団扇

太田小唄が書かれている団扇

私が撮った「常陸太田市」

「常陸太田の今」にたくさんのご応募ありがとうございました。次号以降も引き続き募集いたしますのでふるってご応募下さい。次号締切は8月25日です。（応募作品が多い場合はご紹介できないことがあります。）

「今日はゆっくり帰ろう」中村香苗さん

「板谷坂。途中に咲く花」sakakiさん

「西山公園」匿名さん

応募・投稿先

フォンズ・ネットワーク事務局
常陸太田市生涯学習センター内
〒313-0061 茨城県常陸太田市中城町3280番地
TEL:0294(72)8888　FAX:0294(72)8880
E-mail:shogaku-c1@city.hitachiota.lg.jp

原点回起 2

「常陸太田古写真館」

前回は自己紹介と常陸太田フォトログというWebサイトをご紹介しました。

25年ぶりに帰郷してから、この街の写真を撮り続けてきて、以前ここはどうだったかな？…と思う場所もありましたが、大きく様変わりした場所もあります。一番驚いたのは（自宅が駅に近かったということもあり…）、常陸太田駅前が大きく変わっていたこと、そして以前の風景は二度とカメラに収めることができないということ、何気ない風景も、あの日あの時あの場所はもう二度と見られないということ…。

そんな時、旧常陸太田の街を撮影した写真があると知り、ぜひこの写真を、好きな時に自由に見られるWebサイトを作りたいと思いました。写真は報道写真といったものではなく、ごく普通のありふれた日常の写真であり、それが貴重な記録であると同時に年月を重ねてなお、鮮やかによみがえる町の記憶です。鯨ヶ丘商店会の会長さん、そして撮影された中村正男さんに直接お会いし、「常陸太田古（いにしえ）写真館」というWebサイトを制作しました。

多くの方に、過ぎ去りし日々の記憶や心の奥に残っている、古き良き時代を懐かしんでご覧いただければと思います。　（武藤　卓・千絵子）

「常陸太田古写真館」Webサイトより、常陸太田駅待合室

常陸太田で探す在来作物 1

本多技研さん（左）と奥様の真弓さん（中）と息子さんの雅樹さん（右）

山形県の在来作物とそれに関わる人々の姿を取り上げた映画「よみがえりのレシピ」。今年４月21日に常陸太田市で県内初の自主上映会が開催されました。

上映に先立ち、市内で今も引き継がれている在来作物を約２ケ月にわたり調査しました。その結果全部で21品目、種類別では豆類が10、アブラナ類が３、カボチャが２、ネギが２、ブドウ１、もち米１、こんにゃく芋１、ソバ１を見つけることができました。

そこで、今回から少しずつ紹介させて頂きます。市内で、ある特定の人たちにより受け継がれてきた在来作物。みなさんとその思いを共有できれば幸いです。

第１回目は、常陸太田市産ブドウのオリジナル品種「常陸青龍」です。この品種は，市内でもともとブドウ栽培を行っていた本多勇吉氏が巨峰の自然交雑実生から育成した黄緑色のブドウ（初結実は昭和53年）で、孫の本多技研さんが平成16年３月に「常陸青龍」として品種登録をしたそうです。ハウス施設の導入が急速に広がり、それに伴い「常陸青龍」の生産拡大が進んでおり、現在55名の方が栽培しています。常陸青龍の栽培を引き継ぐ本多雅樹さんは「これからも常陸太田市を代表するブドウとして育てて行きたい。」と意気込みを語ってくださいました。　（よみがえりのレシピプロジェクト常陸太田　岡崎　靖）

〔在来作物データ〕

名　　称	常陸青龍
品　　種	ブドウ
特徴・性質	巨峰の突然変異種、果実の色は黄緑色。巨峰と比べて糖度が高く、酸味・渋みが少ない。果房重450～500グラム前後。
収穫時期	ハウス施設栽培は８月上中旬ごろ、露地栽培は９月上旬ごろ
食べ方	皮をむいてそのまま食べる。酸味が少なく、さっぱりとした甘み

百姓母ちゃん農日記 10
もんぺ便り

『ズッキーニ三昧!!』

西洋野菜・イタリアンのイメージが強いズッキーニ。どうやって食べるの？とよく聞かれる。「かぼちゃかと思って植えたら、馬めの金○みていなのができた！何だこれ？」と聞いてくる隣のじいちゃんの発言に、馬の金○など見たことのない私は勝手に想像を膨らましたり（笑）。確かに株元からドカーンと大砲のように成る様はそうも見えるが…。

自分で作り始めて、毎日たくさん成るズッキーニをあの手この手で食べているうちに、ズッキーニは火の通し方や、ものの大小によって、さまざまな味に変化することを知った。子どもに人気のパンケーキは、さいの目切りにしたズッキーニを小麦粉と塩と水で溶いた生地に入れて焼くだけ。両面こんがり焼けると同時に、中のズッキーニもほどよくやわらかくなって、ジューシーな果肉の味わいと小麦粉の味が相性抜群。

シンプルにソテーするものは、あまり火を通しすぎないのがコツ。そして、この場合はあまり大きいものよりも、果肉が硬くしっかりしている小さいものが合う。

逆に、収穫が遅れて大きくなってしまったものは、だし汁でおでんの大根のようにじっくり煮込み、冷やして食べると、とろっと煮崩れした位がおいしい。すりおろしてチーズと混ぜたパスタソースや、中身をくりぬいて肉詰めし、オーブンで焼いたのも美味。砂糖で煮てジャムやコンポートのように食べてもおいしい。和・洋・菓子と様々使える万能選手なのがズッキーニだ。

夏の野菜だが、湿気に弱く病気も入りやすいので、旬は６月と９月。一日に５㎝くらい伸びるので、毎日畑にいって、大きい葉っぱをかき分けながらハサミ片手に収穫しなくてはならない。

夏の夕方、出かける前の我が家の合言葉「じゃあ、ズッキーニとってから出発しようね～！」そうじゃないと、翌朝には“ビッキーニ”になってしまいますから！

（布施　美木）

子育て奮闘記
踊るママパラダイス 64

長男のユースケに障がいがあるためか私はいつも自分の最期について考えているような気がします。「私が死んだ後」「私が死んだら」「私が死んでも」といったこと。

親亡き後の子ども達が自力で生きていけるようにすることが親のつとめと思っています。そのためには自分で「生活の糧（かて）をかせぐ」はもちろん、料理、洗濯、掃除。それからちょっと難しくなりますが地域での生活。人との関わり方。ユースケにとって一番苦手なことですが人は一人では生きていけません。とはいえ、それは娘達にとっても同じ事で親の目の届かない場所では失敗しながらも学んで欲しいものです。

常にスマートフォンを手放さず、直接話したこともない人とコミュニケーションをとる娘達を見るたび、その相手を友達と呼ぶのはいかがであろうか、げんこつの一つも落としてやりたいと思っています。この話題は往々にして自分が古い人間であることを痛感させられますが、おばちゃんになった今言わずにはいられない私。

今年高校生になったユキノが初めて自分のスマートフォンを手にして数ヶ月。長女のスミレの時も同じに不機嫌になりましたが教科書を忘れてもスマホは忘れなかったり、提出物の期限には無頓着でもスマホのバッテリーの残量には神経質なところが嫌です。友達と呼ぶ人たちも「本当に？」という感じです。

そしてなにより嫌なのは、私と一緒に出かけても一人でいるような感覚になることでしょうか。買い物中も、観光中でもメールのやり取りをしていて話しかけても上の空に見えることが寂しくて「携帯なんか便利にならなくていいのに。」

流した涙や握った手の温かさを実感できる人間になって欲しいです。豊かな人間関係を築けていれば親も安心してサヨナラを言えるというものです。

――わいわいネット　織田　裕子――

携帯が便利だと思う瞬間。

リレーエッセイ「思い出の絵本」 『100万回生きたねこ』 ～64～

（馬場町　木村　俊介）

娘の成長を振り返ると必ず思い出す絵本があります。「100万回生きたねこ」です。長い年月を生きたのにだれに対しても涙を流したことのないねこが、ある時白いねこに出会い本当の愛を知って成長してゆく話です。

これを娘に読んであげたのは、妻が２回目の妊娠で入院し、はじめて２人で過ごした時です。当時２才だった娘に、お母さんのお腹が痛いのでお医者さんにみてもらわなければならないと話しました。娘なりにお母さんがいない訳を理解しようとしているようでした。お母さんを病院へ送り、夕方になって家に帰りました。娘の好きなものを夕食にして楽しく過ごしお風呂に入って寝る時間がきました。お母さんのいない初めての夜です。寝かしつけようとして絵本を読みきかせました。何冊か読んでもなかなか寝ません。不安なのでしょう。今度は「100万回生きたねこ」を読みました。話の最後のくだり、本当に愛した白いねこのために100万回生きたねこが生まれてはじめて涙を流して100万１回目にはもう生きかえらなくなり、おしまいと読み終えると、娘は「もう１回」と言いました。もう一度最初から読みます。最後になり、おしまいと終えると、「もう１回」。私はこの調子で何回も読みました。途中眠気との戦いも始まりました。その度「お父さん、寝ないで！」と起こされ「もう１回」。そのうち娘も疲れやっと寝ました。娘は彼女なりに成長しようとしていた気がします。本当に愛する者のために成長した100万回生きたねこのように、大好きなお母さんのために寂しい夜をがんばって過ごそうと必死になってもう１回、もう１回と絵本を一緒に読んでいた気がします。その娘も今はもう小学５年生です。あの時、流産で生まれてこなかった子の分までグンと成長して、ずい分とお姉ちゃんになりました。

（次回は増井町　市毛　誉夫さん）

ほっとひといき　ガロアムシ

少し変わった名前ですが、この虫の発見者が日本に来ていたフランス外交官ガロア氏であることから付いた名前です。成虫で２㎝ぐらいですが、成虫になるまで５～７年、成虫で１、２年生きる寿命の長い昆虫です。体は、羽がほとんど退化した特異な形態で、原始的な特徴を残し、古生代の化石も見つかっており「生きている化石」の代表昆虫です。

茨城県内では花園や八溝山、市内では里美などで見ることができます。渓流の源流近くの「がれ場」の中に住み、他の昆虫を食べて生活しています。夏は地下の深い所にいることが多くなかなか見ることが出来ませんが、冬は地表近くにも出てくるので、どちらかといえば冬の虫といえます。また、環境省によって良好な環境を示す「指標昆虫」10種の一つにも選ばれており、この昆虫が見られるところは良い環境が残っているといえます。きれいな山の中の石の下を静かにのぞくとこの珍しい昆虫に会えるかもしれません。

（佐々木　泰弘）

ちょっとひといき　ガーデン&カフェ「Viola Japonica（ヴィオラ　ジャポニカ）」

２年前にオープンした久米町にある「ヴィオラ　ジャポニカ」。ヴィオラ　ジャポニカとは、植物学名でコスミレの意味。店主の梶山順子さんは40歳になった頃に土に関心を持つようになり、ガーデニングが趣味に。会社の隣の土地が荒れていることに気づき、手入れしはじめてみたところ、見に来てくれる人が集まってきて、お茶を出すようになり、お茶を出すスペースを作ったことがきっかけで、現在の形になりました。こだわりは「自分も植物にも無理をさせないこと」。ランチは、洋風の家庭料理です。カフェスペースではお店の雰囲気と合う友だちの手づくり小物も販売しています。（白石　百合乃）

- ●〒313-0123
  常陸太田市久米町233-1
- ●Tel　0294-70-3015
- ●営業時間　10:00-17:00
  （ランチ　11:00-14:00）
- ●定 休 日　日曜日
- ●日替わりランチプレート 800円／コーヒー・紅茶セット 1000円／コーヒー 350円～
- ●URL　http//violajaponica.com

常陸太田の地名話 ～11～

佐竹（さたけ）と久米（くめ）

【常陸太田市佐竹地区】
【常陸太田市久米地区（久米町）】

宮本元球（げんきゅう）氏は『常陸国郡郷考（くんごうこう）』で久慈郡二十郷の一つである「佐竹郷」と「久米郷」は、狭竹（さたけ）物部と久米物部が居住した地であるので「佐竹」「久米」と名づけたと述べている。『新編常陸国誌』も「25部の天物部（あまつもののべ）の中に狭竹物部という部があって、この狭竹物部が居住した土地ということから郷名にした。また、近くの地に久米郷があるが、これも25部の物部の一つである久米物部が居住したことに由来する。」として同じような説を述べている。

このことから、「佐竹」と「久米」の地名は、この地に居住した狭竹物部と久米物部に由来すると推測できよう。　（川松　博）

＜参考文献＞「常陸国郡郷考」「新編常陸国誌」「金砂郷村史」

国指定重要文化財　佐竹寺

久米城跡と根小屋に広がる久米の住宅地

新太田点描 2

小川芋銭と太田（下）

小川芋銭の二回目の太田来遊は昭和八年（一九三三）の西山荘訪問であろう。芋銭は若い頃から俳句をよくし、自分で描いた絵によく自賛の句を添えている。また短冊等に認めた句は、今でも時折見掛けることがある。

これら芋銭の俳句を集めて一冊に編纂した俳句集が、芋銭の没後の昭和十七年（一九四二）、弟子の酒井三良（さかいさんりょう）によって、東京都下の芸林堂（げいりんどう）から発行された。題して『小川芋銭先生追悼草汁遺滴（そうじゅういてき）』という。この句集には、前回に紹介した『草汁漫画』の句は収録されていないが西山荘で詠んだ俳句が収録されている。

西山荘林泉
水落ちて聾なき石の春たふと
西山荘白蓮池
此池にふる花見たし山桜
（昭和八年及其頃）

と句を詠んだ年月については曖昧な推定をしている。

ところが、次に紹介する二通の書簡からこの推定は正しかったことが判明する。

一通は、昭和八年四月二十六日付け消印のある、芋銭から静岡県在住の松崎祐存宛のものである。この稿に関係する部分だけを紹介しよう。

（下段の図版参照）

…〈前文省略〉…
此度水戸へ参り西山荘を訪らひて一・二句
白蓮池にちるさくら一鳥鳴いて
水落ちて聾なき石の春たふと
正々
四月二十六日　芋銭
松崎祐存様御貴下

もう一通は福島県在住の医師池田龍一宛のものである。同様に紹介しよう。

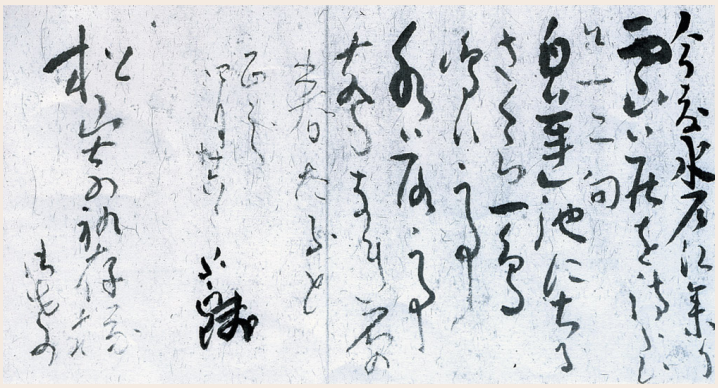
…〈前文省略〉…
水戸滞留中西山林泉の二・三句
水落て紅蓮池となる
水落て声なき石の春たふと
白連池
此池にふる花見たし山桜
西山荘鴨居
貝殻に風光るさびしさ
御令閨御子様達御清傳是祈候
四月二十六日　小川生
池田龍一様

ここで先に紹介した『草汁遺滴』の句と二通の書簡の句を比較してみると、字句表現に少しばかりの違いが見られるものもあるが、昭和八年四月の句と判断して差し支えないであろう。付け加えておくが、私にはこれらの句の推敲の過程や優劣を論ずる能力はない。

以上、二冊の冊子と二通の書簡により芋銭は明治期と昭和期の二度は太田地方を訪れていたことになる。

また、『太田盛衰記』（吉原赳著・昭和十年発行）の口絵には、芋銭が描いた「鯨崗より真弓千石眺望」の画が掲載されている。これを推測するならば落款と手書き印から、昭和八年の西山荘訪問の時かと思われる。

さらに云えば、芋銭の挿絵帳には「久慈川流域の水車小屋の景」と題する簡単なスケッチが掲載されている。このスケッチ場所は久慈川下流域の落合、堅磐、下土木内辺りとの説もあるが確認はされていない。

もしこのスケッチが前述の二回の来遊と別の時期であったとすれば、芋銭は太田の地を三度訪れていることになるが、現在それを裏付けるものはない。

（吉成　英文）